

最後の思い出



中学生になり、二か月が過ぎた頃だった。その日も、公園で親友の潤子と遊ぶ約束をしていた。「じゃーん。スマホ、買ってもらっちゃった。これで潤子といつでも連絡が取れるね！」公園に着くなり、私は買ったばかりのスマートフォンを潤子に見せた。「やったー。さっそく、連絡先を交換しよう！」

SNSは便利だ。感じたことをすぐに伝えられる。写真や動画だって共有できる。でも、使い方には気を付けなければいけない。いつまでも使っていたり、相手の顔が見えないからこそ言葉には注意しなければいけなかったり。だから私も、潤子と「大切なことは直接会って言葉で伝える」というルールを決めて使うことにした。初夏の真っ赤な夕日を共に浴びながら、額の汗が光る中で約束だった。

「大切な話があるからSNSではなく、直接話したいの。」

十月のある日、私は潤子からいつもの公園に呼び出された。

「再来週には、引越しをするんだ。一か月くらい前に親から言われてたんだけど、なかなか言い出せなくて。ごめん、真奈……。」

「えっ……。冗談、だよな？」

親友からの突然の告白に、私は耳を疑った。

「冗談、だったらいいんだけど……。」

今にも涙がこぼれ落ちそうな潤子の目が、ことの真実を語っていた。

私と潤子は、小さな頃からの親友だった。家が近所だということもあり、何をするにも一緒だった。スマートフォンアルバムには、二人の思い出の写真がいくつもある。そんな大切な存在の潤子とお別れをしなければならぬ。私は言葉が出なかった。頭の中は真っ白だった。あと二週間……。



そのあとのことは、どんなやりとりをしたのか、全く覚えていない。沈んだ気持ちで家に帰り、ベッドに倒れこんだ。そして、泣き続けた。

いつの間にか寝てしまっていたようで、スマートフォンのお知らせで目が覚めた。潤子からのメッセージだ。

「今日はおめんね。突然でびっくりしたよね。残り少ない日々だけど、よろしくね。」

「うん。すごくびっくりした……。でも、くよくよしてられないよね。あと二週間、よろしくね！」

あと二週間。親友である私が落ち込んでいる場合ではない。潤子のメッセージを読みながら、私は潤子との思い出作りのため、自分に何ができるか考え始めた。



次の日。晴れやかな秋空の朝、私は颯爽と学校へ駆けて行くと、早速思いを行動に移した。潤子が喜んでくれるお別れ会を開く。これが今の私にできる最高の思い出作りだ。すでに登校していた智実と結花にもこの話を伝えた。私と潤子と智実と結花。私たちはSNSでもグループでやりとりをしている仲よし。二人も、潤子からのメッセージで引越しのことを聞いていたようだ。それで、潤子にしてあげられることはないか相談しよう、早く登校してきていたらいい。さすがは智実と結花だ。二人とも、私の提案に賛成してくれた。そうと決まればと、さっそく準備に取り掛かった。

「ここをこうすると、もっと喜んでくれるんじゃない？」

三人でお別れ会について話し合っていると、潤子が登校してきた。

「みんな、おはよう。昨日は突然おめんね。」

「うん。あと少しだけど、またよろしくね。」

その日は、いつも以上に潤子と共に過ごした。残り二週間という限られた時間から考えると、もちろん喜ばしいことであった。しかしその反面、三人で相談できる貴重な時間が減ってしまうのは惜しい……。そんなことを考えていた帰り際、智実が言った。

「じゃあ、SNSでグループをつくらうよ。そっちの方がスムーズに進められるんじゃない？」

「そうだね。賛成！」

私たち三人は、サプライズのためのグループをつくってやりとりを始めた。なかよし四人で最後に最高の思い出を作るため、私はやる気に満ち溢れていた。

それから毎日、私たちは準備を進めた。二週間という短い期間で、最高の会が開けるように。

もちろん、潤子に悟られないよう、SNSでの連絡を中心としていた。私も智実も結花も、「潤子を喜ばせたい」その一心でやりとりをしていた。しかし、そんな私たちの様子について、潤子がSNSでメッセージを送ってきた。

「真奈、最近、智実と結花がそっけない気がするの。もうすぐお別れだから、休み時間ももっと話したいんだけど。SNSもそう。あんなに毎日盛り上がった四人のグループも、ここ数日はさっぱりだし。あと数日なのに、なんか、みんなとすれ違いばかりになっている気がするってどうか……。ちょっとさみしくって。」

「そんなことないんじゃない？きつと、『別れる』ってことを考えすぎて、それがみんなとの距離に感じちゃってるんだよ。グループのことだって、きつと話題がないだけだと思うよ。」

ハラハラしながら返信をした。何とか取り繕つくろえただろうか。

「うーん、そうなのかな。」

腑ぶに落ちないような返答ではあったが、いつも通り趣味の話題で盛り上がったので、きつと大丈夫であろう。念のため、二人にメッセージを送った。

「智実、結花、お別れ会の準備ありがとう。潤子が喜ぶ姿を想像すると、すごく楽しみだね。ただ、潤子はみんなと今の時間を大切にしたいと思ってるんじゃないかな。休み時間も、もっと潤子と一緒に過ごそうよ？」

二人からの返信は早かった。

「準備も進めたいけど、潤子のための会だもんね。」

智実は分かってくれたようだ。しかし、結花は違った。

「何よ、それ。時間がないんだから、仕方ないじゃない。そもそも、真奈が言い出したことでしょ。限られた時間で準備をしているんだからさ。だれのためにやってると思ってるの！」

その日は、それ以上結花からのメッセージが来ることはなかった。

次の日、私は学校に着くなり結花に謝った。



「昨日はごめん、がんばってくれてる結花に不快な思いをさせちゃって。」

「ううん。私の方こそごめん。真奈のメッセージを違う意味でとらえて、ついカツとなっちゃって。」

私たちがもめている場合ではないと、私たちは仲直りをして準備を続けた。もちろん、潤子との時間を大切にしようということも忘れずに。でも……。潤子と話す二人の様子は、確かに何だかぎこちない気がする。潤子に目をやると、浮かぬ表情をしている。どうすれば……。潤子に合わせる顔がなく、一人で帰った。

家に着き、もやもやした気持ちでぼーっとしていると、「だれのためにやってると思ってるの!」という結花の言葉が、私の頭によみがえってきた。そんなとき、スマートフォンが鳴った。潤子からのメッセージだ。

「真奈。大切な話があるんだ……。いつもの公園に来られる?」

「うん。私も、話したいことがある。」

気分はどんよりとしていた。空模様も、心の中が表れたかのような曇天^{どんてん}。私は走って向かった。額に、じっとりと汗をかくほどに。

雨粒がこぼれ始めたころ、私は公園に着いた。潤子はすでに来ていた。

「潤子。智実、結花のことなんだけど……。」

私の言葉を遮る^{さへぎ}ように、潤子が話し始めた。

「真奈、ごめん……。家族の都合で、私たちの引越^{ひこ}し早まっちゃった……。今週いっぱい、こっちを離れるんだ。荷物の整理とかしなくちゃで、あと一日しか学校にも行けないから、みんなにきちんと話すことができなくなっちゃって。だから、せめて真奈だけにはと思っで。」

「……。えっ?」

雨粒が私の目をかすめた。さっきまでよりも、雨が強まっている。

「もっと、みんなと話したかった。もっと、もっと……。」

私の頭の奥には、降り続ける雨の音に混じる潤子の言葉にならない声が、いつまでも響き続けていた。



男らしさ女らしさ、自分らしさ



「寛幸、何しているの。恵君、もう迎えに来てくれているよ。」
「はーい。」

と、返事をし、「学校行きたくないなあ。」とつぶやいた。

毎朝、寛幸は、野球部の練習に、恵と一緒に参加している。恵は、小学生の頃から少年野球チームに所属していて、一年生ながら次の新人戦では、レギュラーとして先輩と試合に出られそうな勢いだ。寛幸はそんな恵と一緒に、野球部に入部した。どこの部活動に入ろうか、ずいぶん迷った。いろいろな部活動に見学に行ったが、結局、野球部にした。入部届を出すとき、頑張るぞという気持ちでいっぱいだったが、心の奥に、何かつかえるものがあったことを今でも覚えている。

六ヶ月前、中学生になり、慣れない制服や新しいクラスメイトに戸惑い、毎日が精一杯だった。部活動は、野球部に入部しようと思うことを家で話すと、野球ファンであるお父さんはとても喜んで、

「寛幸、キャッチボールならお父さんも付き合うぞ。」

と、押し入れの中からグローブを出してきた。

「野球部って、土日に練習試合とかに行くのよね。お弁当作らなくちゃね。」

お母さんも張り切り切りました。そんな二人の気持ちに応えるように、

(レギュラー目指して頑張るね。)

と、言葉に出さずに、心の中で何度も何度も繰り返した。

体を動かすことは嫌いではない。野球も少しずつ上手になってきて、最近では顧問の先生にも褒められるようになってきた。勉強は嫌いな教科もあるが、英語の授業は好きだ。英語を話す活動では違う自分になれる気がする。でも学校にいと、何かに覆われている自分を感じることもある。そのことを誰かに伝えたことは一度もない。



拓巳：中学1年生。
野球部に所属。



寛幸：主人公
中学1年生。
野球部に所属。



星香：中学1年生。
サッカー部に所属。



恵：寛幸の友達でよき理解者。野球部に所属。

朝練習が終わり、恵と一緒に昇降口にいると、サッカー部の朝練を終えた星香が、「おはよう。今日も暑いね。」

と、日に焼けて真っ黒になった笑顔で近づいてきた。星香は、サッカー部に入っている。部員三十六名中、女子は一人だ。寛幸が通っている学校は、制服を選ぶことができる。女子は、スカートタイプとスラックスタイプの二つの中から好きな方を選抜できる。スカートタイプが主流だが、何人かスラックスタイプの制服を着ている女子もいる。星香は、その何人かの一人だ。「おっとお、誰かと思ったら、星香か。後ろから見たら、誰だかわかんなかった。相変わらず、女らしくないな。」同じ野球部の拓己が、後からやって来て、星香をからかうように話はじめた。

「お前さあ、見た目も中身も、全然、女らしくないよね。他のみんなはスカートなのに、ズボンをはいて、大股で歩いている。サッカーやっている姿なんか、まるで男。」

寛幸は、拓己に何かを言いたかったけれど、何も言えず、目を伏せた。しかし恵は違った。

「サッカーやっている星香は、格好いいよ。体格は他の部員よりも華奢だけれど、スピードがあるし、体力もある。ズボンだって、はきたい方を選んで、はいているだけだろ。」

恵のこういう所が好きだ。思ったことを、きちんと言える。自分は……。

ああ嫌だ。拓己も、学校も、自分も、何もかも嫌だ。

一時間目は英語だ。いつもは楽しい英語も、今日は集中できない。嫌なことが、次から次へと思い出されてくる。

小学生の時、味噌汁を作り、レポートにまとめる宿題が出た。クラスみんなは「面倒くさい」と文句を言っていたが、寛幸はワクワクした。近くに住むおばあちゃんの家に行き、煮干しと鰹節で、丁寧に汁をとった。具が問題だ。色々迷っていると、おばあちゃんが、畑から埼玉青なすを収穫してきてくれた。埼玉青なすは形は丸く、身が締まっていて、火を通すととろけるような食感になり、寛幸は大好きだ。埼玉青なすとネギ、厚揚げで味噌汁を作り、おばあちゃんやお父さん、お母さんに振る舞った。みんな「美味しいし、栄養満点!」と喜んでくれた。寛幸はそれをレポートにまとめ、学校に持って行った。担任の先生が、寛幸のレポートを褒め、クラスみんなに紹介してくれた。

「なんか寛幸ってさ、女みたい。料理とか得意そうだし、この間なんか編み物をやってみたって言ってたんだぜ。」
クラスメイトのひそひそ声が聞こえてきたが、それ以降は、何も聞こえなかった。

(料理が好きだっていいだろ。男も女も関係なく、美味しい料理を作る料理人はいるだろう……。編み物だって……。)

英語の小池先生の話す声が遠くで聞こえ、現実には押し戻された。何かには押しつぶされそうな気持ちで授業を受けていたら、小池先生が「coming out」について話し始めた。小池先生の話は、いつも面白い。

「come outは『くから出る』、よくcoming outと言うけど、じゃあ、どこから出てくるのかな。語源はComing out of the closet.なんだよね。」

クロゼットから出る、クロゼットにしまい込んだ本当の自分。本当の自分って、何なんだろう……。



夕方、お母さんにちよっと出かけてくると言い、ヒグラシの鳴く公園を、ゆっくり歩いてきた。すると、ランニングコースを走る星香に会った。

「寛幸、どうしたの。珍しいね、こんな時間に。」

星香は汗を手で払いながら、近づいてきた。

「そういう星香こそ。」

「いつも、この時間はトレーニングだよ。サッカー部の他の人達より、体力がないからね。あの中でレギュラーをねらうには、まずは体力をつけようと思って。」

「今日さ、拓己が嫌なこと言っていたよね。何か言い返したかったんだけど、何も言えなくて、ごめん……。」

「全然気にしてないよ、って言うか、言われることに慣れたかな。小学生の時はいろいろ悩んだし、家でも、女らしくって言われてた。」

「そうなの？」

「うん。でもね、正直、女らしくとか、男らしくとか、よくわかんなくて。何かをやる度に、これでいいのかなくなって考えるようになった。好きなサッカーも、やっちゃいけないのになって。どんどん自分が自分らしくなくなっていくのがわかった。先生が、よく夢について話していたけれど、何も思い浮かばなくなった。それで、女らしくよりも、自分らしくを優先させるようにしたんだ。そうしたら、好きなサッカーを頑張る自分を好きになった。ただ、それだけ。じゃあね。」

ランニングコースに戻り、走り去っていく星香をながめていた時、本当は、野球部ではなく、家庭科部に入りたかったことに気付いた。部活動見学会で、「おむすびレシピコンテスト」に向けて頑張っている家庭科部の様子を、廊下からそっと見ている。

た。自分だったら、あんなおむすびを作るのに、などと考えていた。料理を考えている自分はきつと星香と同じ顔をしているだろう。でも、家庭科部に入ったら、またからかわれるかもしれないと思って、入部するのをやめた。野球部なら恵もいるし、きつとお父さんも喜んでくれると思ったから。

「自分らしさか。」

声に出して言ってみた。自分を覆っているものが、ほんの少し軽くなった気がする。

翌朝も恵が迎えに来てくれた。恵と話をしながら学校に向かう。ふと、恵になら、自分らしさについて話してもいいかな、という気持ちになった。

「恵ってさ、自分らしさについて考えたことある？」

「うん。どうだろう。でも、自分の信念や考えをもって頑張っている人って、格好いいと思うよ。この人は、こういう信念をもって頑張っているのかな、って考えると、自分も、自分らしく頑張りたいと思うかな。今は、野球に夢中だけだね。」

恵の笑顔は、キラキラしている。その理由が、今、わかった。自分はこれからもこの恵の笑顔に励まされながら、クロゼツトから一步一步、歩み出ていくのだろう、とふと思った。そして自分も恵みたいにな……。

学校に向かう道がいつもと違う気がしてきた。まだまだ暑さが残っている中、汗をかきながら、一步一步進む先にあるのは、今まで自分が感じていたものではなく、顔を上げ胸を張って過ごせる日々かもしれない。

(そうだ、いいことを思いついた。)

「今度、いつもよりも三十分早くうちに来てよ。朝ご飯作るからさ。食べてみてよ。」

と、寛幸は笑顔で恵を誘った。

「やったー。喜んで！」

恵も、満面の笑みだ。

さあ、何を作ろうか……。



①性の在り方を考えてみよう

男らしい(性格 ふるまい)

女らしい(性格 ふるまい)



「男らしい」「女らしい」を入れ替えてみましょう。
どんな感じがしますか。感想を交流してみましょう。

②属性について考えてみよう

「自分はこんな人」と表すために必要な要素を書き出してみましょう。

(年齢、性別、出身地、趣味、好きなもの、外見、体質など)

※公表したくない内容は書く必要はありません。



上の要素のうち、ひとつを次の「○○」に入れてみましょう。

「なんかあの人、○○っぽくない?(笑)」

「○○だってバレたら、みんなからひかれるよ」

「○○の人って、なんか怖いよね」

その人をその人として成立させている要素を「属性」と言います。属性を否定されるとどんな感じがしますか。感想を交流してみましょう。

すべての人に読書の楽しさを



その図書館には、読書を楽しむ人を、あたたかい眼差しで見つめている一人の職員がいます。彼の名は、佐藤聖一さん。彼は、視覚障害者です。

佐藤さんは、埼玉県立久喜図書館で働いています。小学校の先生だったとき、病気になる、突然視力を失いました。

(何も見えない私は、これからどうなるのだろうか。)

仕事も辞めた佐藤さんは、大きな不安から、一人でふさぎこんでしまいました。しかし、くよくよしていても始まりません。視覚障害者として自立するために、家族からも離れ、一人で生活するための訓練を始めたのです。しばらくして、身の回りのことができるようになると、次は外に出て、白い杖を使っての歩行訓練です。バスや電車の乗り降りなど、命の危険と隣り合わせのこともありました。

(ああ、見えていたときは簡単にできたことが、できなくなりました。)

これまで見えていたものが見えない恐怖感に襲われたり、悔しい思いをしたりすることもありました。しかし、一緒に訓練する視覚障害者の仲間と話をしたり、笑い合ったりすると、頑張る勇気が湧いてきました。

(自分が視覚障害者になって、初めてわかったことがたくさんある。みんなはすごいな。目が見えないことでたくさんの苦勞をしているけれど、できることを楽しんでいる。私だって……。)

佐藤さんは一生懸命訓練に励み、一年後には、なんとか自分一人で生活できるようになりました。

(よし。次は、仕事をして、経済的に自立しよう。せっかく働くなら、目が見えない私だからこそできる、社会で人のためになる仕事を探そう。)



県立久喜図書館で働く佐藤さん

そんなとき、視覚障害のある図書館職員から「一緒に仕事をやってみませんか。」と誘われました。読書が好きだった佐藤さんは、図書館で働くことを決心しました。そして、大学に入学して、司書になるための勉強を始めたのです。

しかし、当時は紙の教科書しかなかったので、大学での勉強は、苦勞の連続でした。友達に教科書の内容を点字や録音テープにしてもらい、テストはタイプライターで解答を作成しました。

（視覚障害者が勉強するのは、とても大変なことなんだな。自分で本が読めたらいいのに。）
勉強の仕方を工夫し、努力を重ね、司書資格を取得することができました。そして、採用試験に合格し、念願の図書館で働くことになったのです。

司書になって、仕事ができることにわくわくしていた佐藤さんでしたが、気がかりなことがありました。当時、視覚障害者が本を読むには、点字本と録音テープしかありませんでした。しかも、佐藤さんのように途中で視力を失った人は、最初から点字ですらすら読書をするのは大変難しいことでした。

（視力が弱い私たちは、読みたい本を読むこともできないのか。）

あるとき、視覚障害のある男性が、初めて図書館の対面朗読サービスを受けにきました。対面朗読というのは、図書館の音訳者が一対一で、読みたい本をその場で読んでくれるサービスです。

「私は視力を失ってから、ほとんどの時間を家で過ごしています。ここで本の朗読をしてくれると聞き、やってきました。初めて好きな本を読めました。家族以外の方が朗読をしてくれました。僕も社会とつながれた気がして、幸せな気持ちです。」

男性の言葉を聞いて、佐藤さんは、胸が熱くなりました。と同時に、新たな疑問も生まれました。（読書をあきらめたり、孤独を感じながら生活したりしている人が、もっとたくさんいるのかもしれない。）

そんな佐藤さんに大きな出会いがありました。東京大学で司書をしていた河村宏^{かわむらひろし}さんです。河村さんが開発したデイジー図書は、これまでの録音テープに代わる、世界共通の音声図書でした。そのデイジー図書は、視覚障害者のためのものでした。しかし、コンピュータの進化とともに、河村さんは、誰でも使えるマルチメディアデイジーへと進化させました。音声



録音テープ



マルチメディアデザイン

音声、文字、画像が同時に再生される。

佐藤さんはまず、図書館職員と一緒に、デジータ点字本などの資料を、多くの利用者に見てもらえる場所に置きました。さらに、図書館職員が参加する研修会などで、講演をしました。また、全国の学校の先生を対象に、展示会も行うようになりました。

（司書や学校の先生にも、様々な読書の仕方があることを知って欲しい。そうすれば、必要としている人や子どもたちに、図書が届くはずだ。）

ある日、佐藤さんの働く図書館に、女の子とお母さんがやってきました。

「娘の音読を家で聞いているのですが、すぐにつかえてしまい、すらすら読めないんです。」

「そうですか。では、ちょっとタブレットに入っているこの教科書を読んでみてください。」

だけでなく、文字と音声と画像が同時に再生できる、電子書籍です。

（これなら、高齢者や、発達障害、知的障害、肢体不自由の人など、今まで色々な理由で読書をあきらめていた人も、本を楽しむことができる。きっとたくさんの人に喜んでもらえるぞ。）

しかし、大きな問題に直面します。せっかく完成したのに、日本では、それを必要としている人たちに、なかなか普及しなかったのです。

（なぜだろう……。）

悩んでいた時、以前対面朗読に来た男性の言葉を思い出しました。

（外に出かけられない障害者もいるはずだ。欲しい情報も手に入らないこともあるだろう。そうだ。障害者だけでなく、もっとたくさんの人に知ってもらえば、使う人が増えるかもしれない。）



デジータ図書と再生機



デイジー図書は今や世界五十カ国以上の国や地域で利用されています。本が自由に読めることは、本当に幸せなことです。でも、まだまだ本を必要としている人がいるはず。読書は、自分の生きる世界を広げ、人生を豊かにしてくれます。全ての人が読書を楽しめるように、これからも私にできることを、一生懸命やっていきたいと思っています。

デイジー教科書を読んだ女の子は、驚いた様子でした。「ママ、これなら今どこを読んでいるかわかるよ。私にも使えそう。」女の子の弾んだ声と、お母さんの笑い声が聞こえました。「今までは、ちゃんと読みなさいと怒ってしまっていました。一生懸命やっていないのだと思ったのです。でも、娘の笑顔を見て、安心しました。こんなよい教科書があるなんて知りませんでした。」

(ああ、今日はなんてよい日なんだろう。)
佐藤さんは、満面の笑みを浮かべました。



この二次元コードから、佐藤さんのお話の動画を見ることができます。



ユニバーサル絵本。県立久喜図書館では、様々な障害のある子どもたちも楽しめる本も扱っている。

コロナ禍で気付いたこと



二〇一九年十二月に発見された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、瞬く間に世界に広がりました。世界中で数多くの人々が感染し、たくさんの方が亡くなりました。

日本でも、人々の生活が大きく変わりました。人と人との接触が制限され、今まで普通に行ってきたことができなくなりました。次に書かれている二名の中学生も、それぞれの状況の中で悩んでいます。

カナコの場合

「ただいま。」

中学校一年生のカナコはバスケットボール部の練習を終え帰宅すると、元気よく玄関を開けた。カバンを下ろすとすぐにリビングにいた父に学校で起こったことを報告した。父は大好きな緑茶を飲みながら、うれしそうにカナコの話に耳を傾けていた。カナコは父と仲がよく、授業や部活のこと、友だちのこと等、何でも話せる間柄であった。特に部活の話は盛り上がった。父も学生時代にバスケットボールをしていたので、プレーに関する質問に何でも答えてくれたからだ。

夕食前、カナコと父はいろいろなことを話題におしゃべりしていた。するとテレビから、飲食店で会食をした際に、新型コロナウイルス感染症に集団感染したとみられるニュースが流れてきた。客がマスクをつけずに会話したり、店員が接客したりした場合に感染したケースが多いというものだった。また、路上で飲酒する人たちが後を絶たず、問題となっているということだった。

父は食堂の経営をしていて、普段はとても忙しい。朝早くから仕込みに取りかかり、閉店後もキッチンのもうじや売り上げの確認など、いろいろな仕事に追われていた。父が経営する食堂は近所から人気があり、常連さんも多く、いつもにぎわっていた。

ところが最近、時短営業の要請に応じて営業せざるをえなかった。そんな状況下でも、父はアクリルパーテーションや空気清浄機を購入して、お客様に安心してもらうという工夫していた。自治体の要請に応じ、さまざまな努力をしながらがんばっている父のことをカナコは誇りに思っていた。しかし、数週間後、残念ながら父は食堂を休業する決断を下した。



「ああ、また緊急事態宣言が延長されたか。もう、耐えられないな。」
父のひとり言が聞こえてきた。

一時休業している父はさみしそうで、その顔を見るのはつらかった。父はカナコに気付くと、力ない声でこう言った。



「お客さんによっては、うちの店が貴重な居場所になっている人もいたんだ。上京して一人暮らしをしている人の中には、うちの店に来るのがとても楽しみだって言ってくれる人もいるんだ。父さんだってそうさ。お客さんの笑顔に、どれだけ救われていたか……。」
カナコは、肩を落として落ち込む父の姿を見て、自分はどうしたらよいか悩んでいた。父のためには、お店を早く開けられるようになってほしい。一方、お酒を出す店でクラスターが発生したというニュースも聞こえてくる。
このような状況の中、中学生の自分に何ができるのか、コロナ禍で大切なことは何かカナコはしばらく考えていた。

ケンタの場合

中学校二年生のケンタは地域のサッカークラブに所属している。あと一ヶ月後には、先輩の最後の大会が控えており、練習は激しさを増していた。尊敬するダイスケ先輩とフォワードを担当し、日々一緒に練習していた。

「もっと動きを速くしないと、点は取れないぞ！」

普段は優しいダイスケ先輩も、最後の大会を前に練習に熱が入る。昨年度の先輩たちは県大会でベスト8だった。ダイスケ先輩たちは県大会を突破し、全国大会を目指している。昨年の秋の大会ではベスト4だった。今回は必ず優勝するとチームで誓い合っていた。

「今度の大会は優勝できますよね。先輩方の調子もいいし、今までで一番良いチームだってコーチも言っていたし。」
ケンタがダイスケ先輩に話しかけると、

「秋の大会では、勝てる相手に負けてしまったしな。今回は絶対に勝ってやるぞ！」
と、ダイスケ先輩は意気込んでいた。

練習の途中で、コーチが笛を吹いた。集合の合図だ。

チームのみんながベンチに集まる。コーチの顔が心なしか暗いように感じた。

「みんな、練習の途中にすまん。大事な連絡があるんだ……。」

そう言ったとき、しばらくコーチは黙ってしまった。チームのみんなはコーチを見つめていた。

「本当につらいんだが、今年の大会は開催されないことになった。」
チームのみんなは、一瞬、何のことかよく分からないといった表情だった。

「コーチ、どういうことですか！」
ダイスケ先輩がコーチに迫る。

「新型コロナウイルスの感染がとまらない。大会を開催すると、感染の可能性が高まってしまふんだ。今度の大会は出場チームが多いし、観客もたくさんくる。感染を拡大させないためには中止せざるをえない。私も納得していないが……。」

コーチは、本当に悲しい顔で言った。それ以上の言葉が見つからずに顔を伏せた。

三年生の反応は様々だった。コーチに詰め寄る人、啞然とする人、後ろを向いて泣いている人もいた。ダイスケ先輩は、ベンチ裏へ歩いていった。

ケントはダイスケ先輩を追いかけた。ダイスケ先輩は一人、涙を流しているようだった。

「ケントたちの代は、必ず全国大会に行けよ。」

後ろを向いたまま、ダイスケ先輩はそう言った。

ケントは、何も言えなかった。ダイスケ先輩は、こう続けた。

「先輩たちの悔しい思いを受け継いで、みんなを全国大会に連れて行くのが俺の役割だと思っていたんだ。責任が果たせなかった……。」

それきり、ダイスケ先輩は、何も言わなかった。ケントの頭の中ではダイスケ先輩の言葉がくり返されていた。

大会がなくなったのは確かに悔しい。でも、サッカーは体と体がぶつかるスポーツだから、感染する可能性も考えられる。チームの仲間が新型コロナウイルスに感染したらと思うと、不安な気持ちになってしまう。

チームのため、先輩のため、ケントは自分に何ができるか考え始めていた。

カナコやケントは、それぞれの立場で、どのようなことを考えているでしょうか。

新型コロナウイルスのまん延によって、人々の生活は大きく変わりました。しかし、コロナ禍で生活することによって多くの人が、社会で生活する上で大切なことに気付きました。一人一人が自覚をもち、自分にできる役割を果たそうとしています。これから社会に出ていくみなさんは、どんな考えを大切にしていきたいですか。



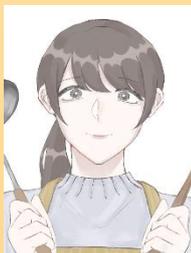
社会の人々は、それぞれの立場で、 どんな思いをもってコロナ禍を過ごしていたでしょうか。

40代 主婦

子どもの休校や夫のテレワークで家族みんなが家にいます。

一緒にいる時間が増えたことは嬉しいけれど、食事の準備や後片付け等、家事がたくさん増えました。

多くのお店が休業要請のため、売り上げが減って困っているとのこと。新たにテイクアウトを始めるお店があれば、積極的に利用するようにしています。魚屋さんでは、飲食店に卸す魚が余っているとSNSに書いてあったので買いに行きました。買い物をすることで、少しでもみなさんの助けになればと思っています。



10代 大学生

授業がオンラインで、大学に行く機会はほとんどありません。

上京し、友達がいない中で一人暮らしは寂しいです。また、家賃も学費も両親に出してもらっているのが引けるので、アルバイトをして少しでも稼げればと思いました。しかし、コロナの影響でアルバイト先も見つからず、食費を切り詰めて生活しています。

このような状況で、学校に通って学べることのありがたさを痛感しています。自分ができることは少ないけれど、せめて感染しないようにすることが、みんなのためになるかと思っています。



60代 ボランティア

コロナの前は近所のお友達と地域を清掃したり、施設を訪問したりしていました。

コロナが流行してから、いろいろな活動ができなくなって寂しいです。それに加え、お友達の中に、家に閉じこもってしまう人がいてとても心配です。

私にできることは少ないですが、数日おきに声を掛けたり、多く作った料理をお裾分けしに行ったりしています。コロナ禍とはいえ、お友達との交流は続けていきたいものです。



50代 会社役員

職場の在宅勤務を推進し、なるべく出社しないで仕事ができるように調整しています。

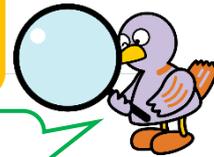
気を遣っているのは、新入社員に対してです。出社することが少ないので、仕事の進め方等、細かく声をかけるようにしています。オンライン会議も少しずつ定着してきました。感染者数を少なくするためには、オンラインは欠かせません。

在宅勤務を効果的に利用して、社員が効率よく仕事できるようこれからも工夫していきます。

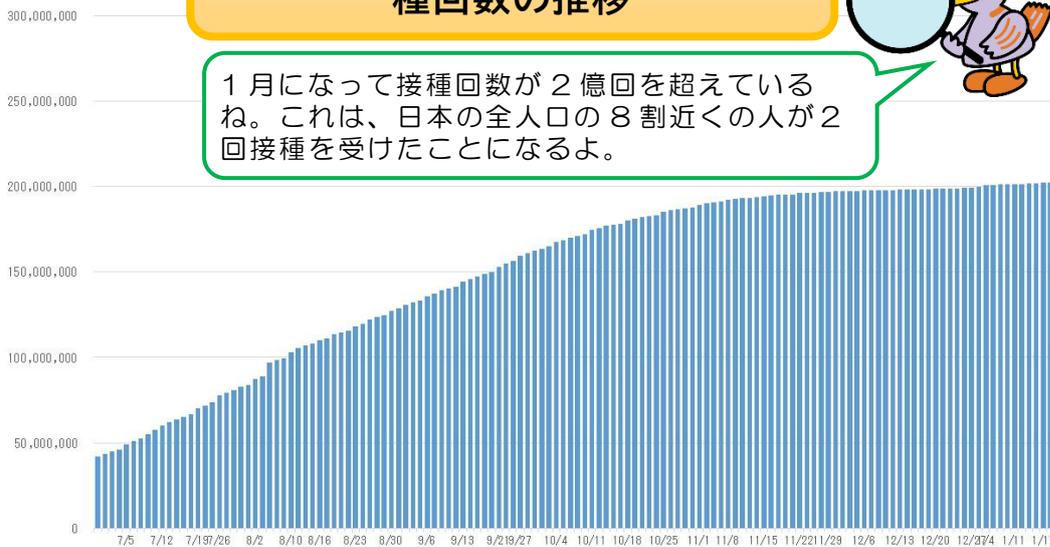


次のグラフやニュース記事を見てください。みなさんはどんなことに気が付きましたか？

新型コロナウイルスワクチンの接種回数の推移



1月になって接種回数が2億回を超えているね。これは、日本の全人口の8割近くの人が2回接種を受けたことになるよ。



(※) 各公表日における総接種回数。なお、接種実績を公表していない土日祝日については掲載していない。

(※) 職域接種については、8月4日以降、ワクチン接種円滑化システム(V-SYS)への報告を使用。

首相官邸ホームページ (<https://www.kantei.go.jp/>) から

海外から見た日本のコロナ対応

「日本人は「気温四十度でもマスク徹底」

カナダレポーターが見た「真面目な姿」に感心」

日本の「マスク着用率」に注目したのは、CBCでレポーターを務めるジェイミー・ストラシン氏だった。「もしもマスクが新型コロナウイルスのユニホームであるならば、日本人はAチーム」の見出しで記事を掲載。こうつぶっている。

「この終わりのないように感じるパンデミック下で、マスクは国際的なユニホームになっている。カナダを含む世界の多くの地域で、マスクは歓迎されてこなかった。ルールがどうであれ、科学が何と言おうとマスクをしない反マスク主義者がそれぞれの地域にはいる。より一般的なのは形だけ従うもので、マスクをあごにつけたり、鼻まで覆わない」

母国の状況を説明した上で「しかし、東京は違う」と強調。日本で見た様子をこうレポートした。

「ここでは、マスク順守はあらゆるところで見られる。来日してから見てきた数多くの人々の中で、マスクをつけていない人は一人もいなかった。一人も、だ。そしてそれは屋内だけでなく、気温四十度の屋外でさえマスク着用は徹底されている」

実際は日本でも全員が着用しているわけではないかもしれない。だが、同氏が見た限りでは強調するほど少なかったようだ。「マスクの適切な着用法を示すポスターから出てきたように、人々は正しくマスクを着用している」と表現。「ワクチンの接種率は低いかもしいれない」とつづり、「しかし、日本は新型コロナウイルスとの戦いを続けている。人々に正しくマスクをつけることを説得することは課題ではない」と説明している。

(二〇二一年七月二十二日「THE ANSWER」から)

認め合うこと、高め合うこと



「こういうことができたらいいな。」

「こんなものがあつたらいいな。」

現代社会では、そんな思いから作られた「便利」なものが増えてきている。ただ、そのような便利なものだからこそ、使い方が大切である。”正しく”活用するには、そこに関わる人たちの気持ちを推し量り、正しく判断する力が必要と求められる。そんなものの代表に、スマートフォン（以下、スマホ）がある。

高校一年生のAは、入学を機に親に買ってもらった新しいスマホに夢中。中学三年生のときに、友達に誘われて学校説明会に参加して以来、学校の雰囲気や先輩方のかっこよさにあこがれて志望した高校に無事合格し、毎日電車とバスで一時間かけて通学している。通学の時の欠かせないアイテムがスマホ。音楽を聴いたり、ニュースを確認したり、好きなアイドルの動画を見たり。時には英単語の勉強もする。これがなかったら、きっと通学は退屈な時間だったろう。

また、中学時代と違って、同級生たちもみんないろいろな地域から通っている。クラスの仲良し五人グループのB、C、D、Eもみんなバラバラの町から通っている。そんな仲間とのやりとりも、いつもスマホ。遠くに離れていても、SNSではいつでもどこでも繋がれる。帰宅後はいつも、みんながチャットをしながら、その日に学校であったこと、クラスの友達のこと、部活のことなど、他愛のない話で盛り上がったたり、みんなが大好きなアイドルの動画を見た感想を言い合ったり。家においてもみんなと一緒にいるみたいで、本当に楽しい毎日を過ごしていた。



そんな楽しい高校生活もようやく慣れてきた一学期の終わり、いつも一緒に遊んでいたEが、私たちに連絡もなく突然学校を休んだ。そして同時に、仲よし5人で作ったSNSのグループからも退室した。

「何かあったのかな……。」

Aは心配で、その晩、Eにスマホで電話をかけてみた。しかし、着信音は鳴るものの、Eは電話に出ない。時間をおいてかけ直してみても同じ。Eから折り返しの電話もない。

SNSのチャットで、他のみんなに連絡すると、BもCもDも皆それぞれ、Eに電話をしたり、ショートメールをしたりしていたけれど、返信がないのは自分と同じだった。

「Eのスマホ、壊れちゃったのかな？」

「でも、電話の呼び出し音は鳴ってたよ。」

「体調が悪すぎて、電話に出られないとか……。」

「そうだったとしても、親が学校に電話くらいするんじゃない？」

「何か事件にでも巻き込まれたとか……。」

その日は、夜遅くまで皆で心配して、チャットへの書き込みを続けていた。

「とりあえず、明日も学校だから、また続きは明日話そう。」

次の日も、Eは学校を休んだ。担任の先生も詳しいことを話さないで、クラスの仲間からもEの欠席を心配する声が聞こえてきた。その日の放課後、それぞれが電話をかけてみたが、やはり誰も連絡が取れなかった。

その日の夜のこと。Aのスマホから、着信を知らせるメロディが流れた。名前を確認すると、ずっと連絡が取れなかったEからである。Aは慌ててスマホを取り上げると、すぐに電話に出た。

「もしもし、Eなの？急に学校休むし、グループからも抜けちゃうし。何があったの？」

「ごめん、心配かけて。でも、今は一人になりたくて……。それで学校も休んでいたの。」

「みんな心配しているんだよ。今日だってみんな何度か電話をして……。」

「心配してくれてありがとう……。でも私、どうしたらいいか分からなくて……。」

「何があったのか、私に話してもらえない？」

「うん……。Aなら、私の気持ち分かってもらえるかもしれない。」

そして、EはSNSのグループから抜けた理由を、言葉を選びながらゆっくりとAに語り始めた。

中学時代のEは、人に流されることが嫌いで、自分が納得いくまで話をしないと気が済まなかった。それが原因で、なかなかクラスメートになじめず、仲の良い友達ができなかった。でも、高校に入学してから出会ったAたち4人とはとても気が合った。そして、そんなAたちといつも一緒に過ごしたり、毎日スマホで繋がったりできることは、今まで経験したことがないほど楽しいことだった。

しかし、みんなとのSNSでのやり取りは、楽しいだけではなかった。ちょっとしたチャットのやり取りで納得がいかなかったことがあっても、その場の流れで調子を合わせなければならぬ。かといって、返事を返さないでいると、催促をするようなメッセージが来る。

(チャットの流れに合わせることも大切かもしれないけど、自分の本当の気持ちと言えないのは……。)

Eはチャットが始まると、いつもそんな複雑な気持ちを感じていた。

ある日のグループチャットで、Eが大好きなアイドルのことが話題になった。最初は他愛もない話が続いていたが、だんだんとそのアイドルの歌への否定的なコメントがエスカレートしていった。みんなが否定的なコメントを入れる中、Eは何度も「そんなことない！」とコメントをしようとした。でも、結局最後までEはその流れを止めるコメントができなかった。そのうえ、流れに合わせて絵文字を送る自分。Eはそんな自分にも納得がいかなかった。

「誰も私の気持ちなんて分かってくれない……。八方ふさがりになってし



まったEは全てが嫌になってしまった。そして、EはAたちのSNSグループから抜けることにした……。

「ごめん。Eの気持ち、全然分かってあげられなくて。私、みんなに今の話をしてもいいかな？Eのために役に立ちたい。」

「ありがとう。でも、私は自分の気持ちに嘘をついてまで、みんなに合わせるのは……。」

「私、Eの気持ちをみんなに伝えてみる。明日、みんなで話し合ってみるよ。」

次の日の放課後、AからEの話を聞いたB、C、Dは、皆一様に暗い表情だった。

B「なんか、Eって勝手にじゃない？ ずっと私たち友達だと思ってたのに。勝手に悩んでいて、勝手にグループからいなくなってる、勝手に学校休んで。あんなにみんなまで心配してたのにさ。言ってくればよかったのに、本当はそのアイドルが好きだって。そういうことを言い合えるのが友達なんじゃないの？」

C「そうかな？ 友達だからといって、価値観はみんな違うものなんだし、そのことをお互いにあえて言う必要もないと思うけど……。」

B「確かにそうかもしれないけど……。私はEのこと、友達として理解していたつもりだったから、それは寂しいな。」

D「私……、Eって、自己主張が強いし、時々面倒くさいなって思っていたの。だから、いつもはEの話に合わせていたこともあったんだけど……。Eも同じ気持ちだったんだなあ。そういう意味では、私もEの気持ち、ちょっと分かるかも。」

A「何だか私たち、Eのことだけじゃなくお互いのこと、ちゃんと分かっていたのかな？学校でも、SNSの中でもみんな仲良しだと思っていただけ、違ったのかも……。」

よりよい社会をつくるために 〜 渋沢栄一の思いの灯 〜



「成年年齢が十八歳に引き下げ」

ある日曜日、高校三年生の私がタブレットでネットニュースを見てみると、令和四年四月一日から成年年齢を十八歳に引き下げることを内容とする記事が目に入ってきた。

（十八歳って、私ももうすぐだな。でも、成年になったからといって何か変わるの？）

私は、漠然とした疑問をもったものの、それについて特に深く考えることもなく、次の画面に目を移した。

次の日の学校。五時間目の「政治・経済」は、「社会参画」についてが授業のテーマだった。

教師「社会参画ってわかる人、いますか。」

生徒「社会に参加するってことですか」

教師「そうだね。簡単に言うところのことかな。「参画」とは、計画に加わることを意味する言葉です。そのため、『社会参

画』とは、社会をよりよいものにするための計画から参加することを言います。」

生徒「社会に参画するって大変そうですね。でも、まだまだ高校生だし、もうちょっと大人になってみないとわからないな。」

教師「でも、もう君たちはすぐ成人するんだよ。社会に出て働いてから、社会について考えるんじゃないかな。」

生徒「成人？ だって自分たちはまだ高校生ですよ。」

教師「あれ、みんなは成年年齢が十八歳に引き下げられたのを知らないのかな。」

私（あ、昨日見たニュースの話だ。そっか、成人になるって、いろいろ考えなくてはいけないんだなあ。）

「成人になること」について興味を持った私は、いろいろなことについて考えてみることにした。「成人になることでどう社会とつながるのか?」、「社会をより良いものにするために自分たちは何ができるのか?」、「将来、自分はどう行動したらよいのか?」

そんなことを考えていたある日、日本史の授業の中で、埼玉県ゆかりの人物「渋沢栄一」の話が取り上げられた。彼は現在の深谷市で農家の子として生まれた。はじめ、倒幕思想の志を抱くも、転じて一橋家の家臣となり、さらに明治維新後は新政府に仕えて大蔵省に出仕。しかし、しばらくして後、官を辞して実業家となって約五〇〇の企業の設立に関わり、約六〇〇の社会公共事業や福祉・教育機関の支援、また民間外交にも力を入れたとのことだった。

江戸末期から明治を駆け抜けた埼玉県の偉人「渋沢栄一」。何より、自分の幸せではなくみんなの幸せを願って、数々の事業を立ち上げたという栄一の生き方に、「成人になること」のヒントがあると考えた私は、彼の生き方について、調べてみることにした。

日本資本主義の基礎を築いた渋沢栄一は、天保十一年（一八四〇年）に武蔵国榛沢郡血洗島村（現在の深谷市）で、裕福な農家の長男として生まれました。栄一の生家は、染め物に使う藍玉の製造と販売をしていました。父の仕事を手伝いながら、商売を通して皆が豊かになるすばらしさを学びました。商売を通じて働くことの大切さ、またお金の大切さを学んだ栄一は、定期的に代官から取り立てられる御用金に納得がいかず、代官ともめ事を起こすなど、この世の不合理的に違和感を覚え、この世を変えていかねばならないと強い志をもつようになりました。

江戸末期、開国により海外の物資が日本に流入したことで、日本経済が非常に混乱していたことから、栄一は、仲間たちと共に「尊王攘夷（※）、そして倒幕こそ日本を変えられる唯一の手段」と考えるようになりました。しかし、一橋家の家臣である平岡円四郎との出会いにより、何のために攘夷を執行しようとしているのか、倒幕をすることで自分が目指すべき世になるのか、様々なことを考えるようになりました。そして、仲間の説得もあり、尊王攘夷、そして倒幕を諦め、平岡の勧めもあり、江戸幕府十五代將軍となった徳川慶喜に仕えることとなりました。

そこから栄一は、様々なことにチャレンジしていくこととなります。一番の転機

（※）尊王攘夷：天皇を尊び、外国勢力を追い払うこと。



渋沢史料館所蔵



渋沢史料館所蔵

が、パリ万国博覧会の幕府使節随員として、海外のさまざまな文化や技術を見たことでした。皆が豊かになる考え方に触れることで、社会全体を豊かにしたいという、自らの思想がまさに実現できるのではないかと自覚することができました。

しかし、栄一の思うようにはいきません。まさに、栄一が海外で勉強をしている時、日本では大政奉還が行われました。信頼してパリに派遣してくれた主君・慶喜こそが、この世を変えることができる唯一の人物と信じていた栄一にとって、とても大きな出来事でした。それでも、栄一は、海外での先進的な学びが、多くの人々を幸せするために役立つと確信していたのでしよう。明治維新の後、新政府に招かれた栄一は、株式会社や郵便制度、銀行、鉄道など日本の近代化に必要とされるさまざまな制度を整備しました。

ところが、栄一が国の経済安定を第一と考えていたのに対して、明治政府は軍備優先を第一に考えていました。そこで、栄一は政府から離れ実業家となり、第一国立銀行を設立、その後、数百の株式会社の創立にも関わりました。さらには身寄りのない孤児や貧しい人々を保護する養育院を運営するなど福祉への取組も行い、多くの社会事業にも関わって新しい時代を切り拓く偉業を成し遂げていきました。

明治初期の一八七四年、栄一が、東京会議所の会頭を任されていたときのことで、当時は貧困に苦しんだり、病気で働けなくなったりした多くの人々が市中にあふれていました。当時、栄一が運営を任されていた養育院では、そのような貧困者や病人、身寄りのない人が、強制的に集められていましたが、ほとんどともに面倒を見てもらえない状況でした。

その状況を知った栄一は、診療施設の整備や、職業訓練所による社会復帰支援、子どもたちへの学問所の設置など、養育院の改革を進めようと思いました。しかし、「苦しんでいる人を救うのは同情や偽善」「窮民を救うことで社会になまけの風潮が生まれる」「国の財政が悪化している中で貧困者を救済することは、税金の無駄遣い」といった考えが多くの人から上げられ、栄一は養育院の廃止を迫られました。

「税金で貧しい人を助けることは、いけないことなのか。」

「貧しい人を助けることは、日本の資本主義を豊かにするためにも、必要な事業ではないのか。」

救いの手を求める人々を前に、頭を抱えていた栄一の頭に、パリで見たある光景が浮かびました。パリでは、貧困者の面倒が裕福な実業家たちの寄付によって賄われ、人々が支え合い、助け合う仕組みがあったのです。そんなパリでの光景を思い出した栄一は、そこに一筋の光明を見出しました。

「もう税金には頼らない。」

栄一は、民間資金や寄付で運営を継続することを決意します。自らが働きかけて多くの経済人から寄付を募ったり、鹿鳴館でのバザーを実施したりするなど資金を集め、養育院の存続に成功します。

その後、栄一は養育院の院長に就任しました。さらには、日本赤十字社や東京慈恵会、理化学研究所などの設立にもかかわり、社会全体への貢献として、福祉活動にも心血を注ぎました。

渋沢栄一の生涯を調べた私は、栄一がさまざまに試行錯誤しながら、社会とつながり、その社会に貢献してきたことを知った。農家の子として生まれ、幕臣となってパリに行き、帰国後、新政府の役人となるも、野に下って経営者となり、社会事業にも尽くす。私は、そんな彼の生涯と自分の未来を重ねた。

（渋沢さんはいろいろな経験をして、その経験を生かして社会をよりよいものにするために、まさに社会に参画していた。私もこれからは一人として、もっともっというんな経験を積んで、よりよい社会をつくるために社会に参画していきたい。）

今、私たちの身の回りにある様々な社会の仕組み。そんな社会を作り出した栄一の思いの灯は、今、確かに私の胸に灯っている。



渋沢史料館所蔵

コラム「渋沢栄一思想」

栄一の思想の一つに「道德経済合一説」というものがあります。これは、広く皆が豊かになる公益的な考え方としての道徳と、利益の追求を求め経済は両立させることができるという考え方です。栄一は、経済の第一義として利益の追求が第一優先とされますが、経済活動が活発に行われるためには、道徳的な考え方が必要であると考えました。「道德」を「論語」に、「経済」を「算盤」に言い換えて、その重要性を語りました。

また、江戸時代末期、士農工商という考え方が広く浸透していて、商売を行う商人は非常に身分が低くされていた時代に、「士魂商才」という考え方を提唱しました。これは、世の中で自立して生きるためには武士のような精神、「士魂」が必要ですが、そのような考え方に偏っては金銭的に、つまり経済面で自滅してしまうため、商人のような能力、「商才」も同時に持ち合わせる必要があるということです。

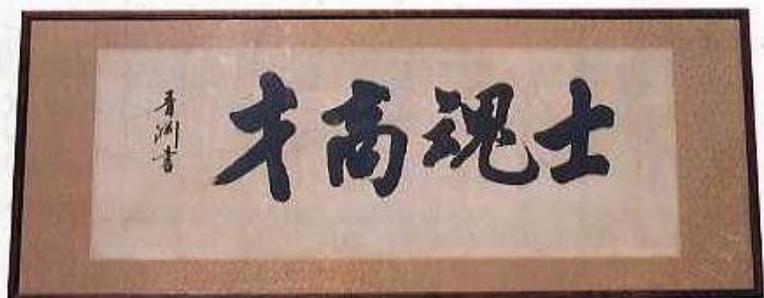
社会参画とは、単に社会貢献などに参加するだけではなく、自ら主体的に計画し行動することでもあります。そして、そのような力を付けるために、学校という場があります。卒業してから豊かな人生を送ることができるように、多種多様な学習活動による学力をはじめ、学校行事等から学ぶ協働の大切さ、豊かな心などを身に付けます。今のうちに多くのことを吸収してください。

また近年、「SDGs※1」の取組についても注目されています。多くの国や地域、あるいは学校で、再生可能エネルギーの問題や、食品ロス問題などが議論されて、実際に行動に移されています。自分のためだけではなく、多くの人のためにもなる共生社会を形成していくこと、これは公共の精神にも繋がります。

多くの企業は一人法であり、利益追求が第一義の目標です。しかし、利益追求だけではなく、「CSR※2」を企業理念に掲げて、環境に配慮したり、児童生徒の学習の場を作ったりするなど、地域住民と共に企業の繁栄も考えている企業も増えています。企業はどちらを優先したらよいのか、皆さんもぜひ考えてみてください。

(※1) SDGs (Sustainable Development Goals) …持続可能な開発目標

(※2) CSR (Corporate Social Responsibility) …企業の社会的責任



渋沢栄一が埼玉県立深谷商業高等学校に来校し講演した際に残した額